

岡崎市景観まちづくりシンポジウム

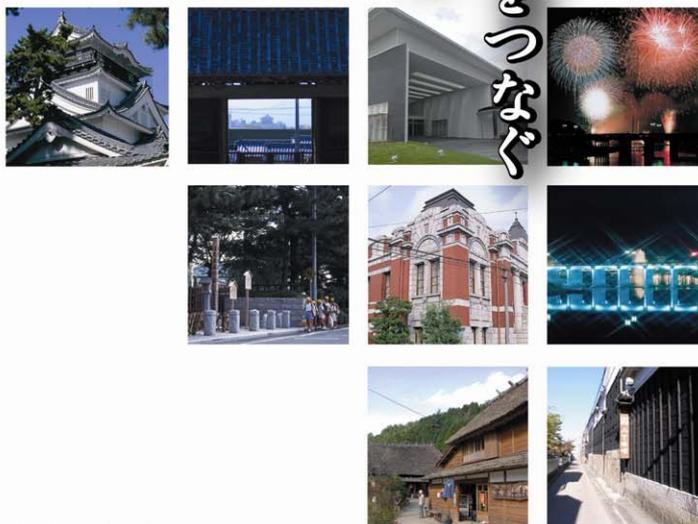
記録集



みんなで創り出す
自然・歴史・くらしをつなぐ

2010年2月14日
岡崎市せきれいホール

開場 13:00 開演 13:30 終了(予定) 16:30



目次

- ≫ 開催趣旨
- ≫ プログラム
- ≫ 出演者プロフィール
- ≫ 開会あいさつ 岡崎市長
- ≫ 【第1部】岡崎市景観計画策定中間報告
- ≫ 基調講演
- ≫ 【第2部】公開討論会（パネルディスカッション）
- ≫ 閉会あいさつ 岡崎市副市長
- ≫ 岡崎市景観まちづくりシンポジウムアンケート集計結果

開催趣旨

わたしたちのまち岡崎は、豊かな自然を背景に、数多くの歴史的・文化的資産を有し、今なお西三河地域の拠点都市として発展する固有の伝統と風格をもつ美しいまちです。これらが織り成す景観は、先人から受け継いだかけがえのない市民共通の財産であるとの認識のもと、市では、この岡崎固有の魅力を活かした「景観まちづくり」を進めるため、現在、景観法に基づく「景観計画」の策定作業に取り組んでいます。

このシンポジウムでは、「景観まちづくりの基本的な考え方(案)」を皆様にご報告し、広く皆様のご意見を伺うと

ともに、地域の個性(地域資産)を活かした「景観まちづくり」を市民、事業者、行政等の積極的な協働により進めていくため、その連携や役割分担のあり方について議論を深め、豊かな自然、固有の歴史、快適なくらしをつなぎ、次代を担う子供たちが誇りと愛着を持てるような、より美しく、風格ある岡崎を目指す取組みの第一歩となることを目的に開催するものです。

このシンポジウムを契機に、身近な景観を見つめなおし、景観まちづくりへの機運がいつそう高まり、活動の輪が広がることを期待します。

景観まちづくり・・・地域の環境を良くする取組みのなかで、景観にも目を向ける、また、景観を良くすることによってまちの環境そのものを良くするというまちづくりのことをいいます。

プログラム

13:00 開場、受付、景観パネル展示等

13:30 開演、主催者挨拶

【第1部】

13:35 岡崎市景観計画策定中間報告(岡崎市)

13:45 基調講演

『景観まちづくりのヒントー
地域資産(ヒト・モノ・コト)を活かすまちづくり』
セーラ・マリ・カミングス

15:15 休憩

【第2部】

15:25 公開討論会(パネルディスカッション)

『みんなで創り出すー
住み良さをつなぐ美しく風格あるまち 岡崎』

【コーディネーター】小川英明

【パネリスト】三矢勝司、太田雅夫、柴田紘一(順不同)

【コメンテーター】セーラ・マリ・カミングス

16:30 閉会(予定)

出演者プロフィール

基調講演講師・公開討論会（パネルディスカッション）コメンテーター

セーラ・マリ・カミングス Sarah Marie Cummings

(株)榎一市村酒造場 代表取締役

- 略歴**
- 1993年05月 ペンシルベニア州立大学卒業
 - 1994年06月 (株)小布施堂に入社、経営情報室を立ち上げる
 - 1996年01月 唎酒師認定
 - 1996年03月 須坂五岳ロータリー・クラブ チャーターメンバー入会
 - 1997年07月 (株)榎一市村酒造場の再構築に取り組む
 - 1998年02月 長野冬季五輪の英国選手団アシスタント・オリンピック・アタッシュ
 - 04月 「第三回国際北斎会議」を企画・運営
 - 10月 榎一「蔵部」レストランを開く
 - 小布施堂、榎一市村酒造場 取締役就任
 - 1999年12月 日本酒造組合中央会 日本酒青年協議会員就任（外国人メンバー第一号）
 - 12月 「桶仕込み酒（白金）」を50年ぶりに木桶仕込み復活
 - 2001年08月 「小布施ッション」(Obsession)文化サロンをスタート、
 - 12月 日経ウーマン誌が選ぶ「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2002」大賞受賞
 - 2002年01月 桶仕込み保存会を発足
 - 2003年01月 「1530」（市ゴミゼロ）：2週間ごとにゴミを拾い続けるボランティア活動を開始
 - 07月 さわやか物産館運営委員会委員就任
 - 07月 (財)日本青年会議所主催 人間力大賞2003 地球市民財団特別受賞
 - 07月 「小布施見（ミ）に（ニ）マラソン」(Obuse mini Marathon) 実行委員長
 - “海のない小布施に、波をつくる”と題し誰でも出来るマラソン (21.0975 km) を企画運営
 - 2004年04月 (株)文化事業部設立 代表取締役就任
 - 05月 (株)修景事業設立 取締役就任
 - 日本酒造組合中央会代表幹事就任（初の女性代表幹事）
 - 2006年05月 (株)榎一市村酒造場 代表取締役就任
 - 外国人から見た観光まちづくり懇談会委員（国土交通省）
 - 観光実務に関するワーキンググループメンバー（国土交通省）
 - 2008年08月 NPO 法人桶仕込み保存会設立代表就任
 - 12月 地域づくり総務大臣賞個人賞受賞



参考出版物：

- 「ジャパニーズ・ドリーマーズ—自己イノベーションのすすめ」2002年9月出版(米倉誠一郎著/PHP 研究所P24～P46)
- 「セーラが町にやってきた」2002年12月出版(清野由美著/プレジデント社)
- 「小布施ッション：長野県小布施町から洗練された発信力」2002年8月出版(日経 BP 企画)
- 「OBSESSION」2002年8月出版(株式会社文化事業部)

もっとセーラさんのことを知りたい方はこちら
 (株)榎一市村酒造場文化事業部
<http://www.bunji.jp>

公開討論会（パネルディスカッション）コーディネーター



おがわ・ひであき
小川 英明

愛知産業大学大学院教授

1951年、春日井市生まれ。ペンシルベニア大学大学院地域科学科博士課程修了。1996年より愛知産業大学教授。専門は都市計画、建築史。Ph.D. 岡崎市都市計画審議会委員、岡崎市都市計画マスタープラン策定委員会委員長、岡崎市環境審議会委員、岐阜市都市景観審議会会長などをつとめる。

公開討論会（パネルディスカッション）パネリスト



みつや・かつし
三矢 勝司

特定非営利活動法人
岡崎まち育てセンター・りた 事務局長

多くのまちづくり関係のNPO活動に携わる。名古屋学院大学政策学科非常勤講師。岡崎市図書館交流プラザ・りぶらを始め、岡崎市内各地域交流センターのデザイン設計に参画



おおた・まさお
太田 雅夫

社団法人愛知県建築設計事務所
協会岡崎支部相談役

(有)千里建築設計事務所 代表取締役
岡崎市図書館交流プラザ・りぶらの総合設計その他、岡崎市、豊田市において多数の高層マンション設計に携わる



しばた・こういち
柴田 紘一

岡崎市長

岡崎市議会議員、愛知県議会議員を経て岡崎市長（現在3期目）

開会あいさつ

岡崎市長 柴田 紘一



皆さん、こんにちは。ご苦労さまでございます。立春も過ぎましたけれども、まだまだ寒い毎日ですが、本日はこのような素晴らしい会を担当の方々のお力で開催いただくことになりました。お忙しいところ多数ご出席を賜りましたこと、厚く御礼を申し上げます。次第でございます。

ご案内のとおり景観行政に関しましては、平成16年に景観法が制定をされましたことを契機に、全国各地で景観のまちづくりというものが大きく進展をいたしております。久しぶりに訪れたまちの姿は、こんなに変わったんだねと、素晴らしいものだねと感心をするような地域がたくさん見られるようになってまいったわけであります。

私どもの、この岡崎市も歴史と文化を誇る、本当に素晴らしい自然環境に恵まれたまちでありますけれども、ややもすればその素晴らしい景観、そして歴史、文化、こうしたものが掘り起こされないままになってしまっているというような事柄も非常に多いわけでありまして、改めてそうしたことに視線を向け、これからのまちづくりをどのように進めていったらいいかということを実際に考えてみるために、大事な時ではないかと思っております。

今朝もテレビを見ておりましたら、奈良県御所市の市長さんが、財政難で大変苦しんでおられるけれども、しかし、知恵を出せば何とかなるといって、まちが持つ知恵を探し求めたという放映をしておりましたけれども、まさしくこの埋もれた幾つかの課題を、みんなの手で掘り起こしていただきまして、また素晴らしいまちづくりに結びつけていただく、そういう大事な時ではないかと思っておりますので、よろしく願いをいたしたいと思っております。

本日のシンポジウムでございますが、今策定中であります景観計画の中間報告といたしまして、景観まちづくりの基本的な考え方をご報告させていただき、皆様方のご意見を伺いますとともに、今後地域市民の皆さん、事業所の皆さん、行政が一体となって協働してまちづくりを進めていくための連携や役割のあり方について、理解を深めていただこうと思っておりますので、よろしく願いをいたしたいと思っております。

よい景観、よい風景は皆さんでつくるものであります。ご来場の皆様方の家一軒一軒も岡崎の景色でございます。どうかそのところに思いをはせていただきまして、有意義なひとときをお過ごし賜りますことを、お願いをいたしまして、ごあいさつにさせていただきます。今日は大変ありがとうございました。

【第1部】岡崎市景観計画策定中間報告



岡崎市都市整備部長 小林 健吾

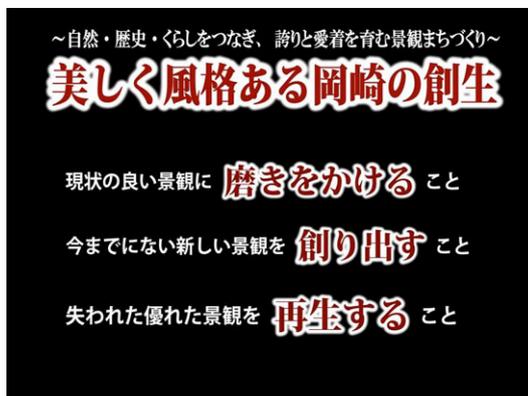
都市整備部長の小林健吾です。よろしくお願いいたします。現在、策定を進めています岡崎市景観計画の中間報告として、景観まちづくりの基本的な考え方についてご報告させていただきます。

初めに、景観まちづくりの理念です。私たちのまち・岡崎は、三河山地から連なる豊かな緑と矢作川や乙川の清流など、四季の移ろいを際立たせる恵まれた自然や地形を背景に、江戸幕府を開いた徳川家康公生誕の地である岡崎城をはじめ、長い年月を重ねたくらしの中に、これまで培われてきた歴史的、文化的資産を数多く有し、今なお西三河地域の拠点都市として発展する固有の伝統と風格を持つ美しいまちです。

この岡崎固有の魅力ある景観は、まさに先人の努力の成果を受け継いだかけがえのない市民共通の財産であるとの認識のもと、私たち一人一人が景観への意識を高め、地域の個性を活かしながら、豊かな自然・固有の歴史・快適なくらしをつなぎ、次代を担う子供たちがふるさと岡崎に誇りと愛着が持てるような景観まちづくりを進め、その魅力にさらなる磨きをかけ、より美しく風格ある岡崎を創生するものです。

自然・歴史・くらしをつなぎ、誇りと愛着を育む景観まちづくりによる「美しく風格ある岡崎の創生」を理念として掲げます。

創生とは、今までにない新しい景観をつくり出すほか、現状のよい景観に磨きをかけることや、失われた優れた景観を再生することです。この理念に基づき、次の3つの将来の景観像を目指します。



1つ目は、自然があふれ、地形が生きる景観を目指します。まちのどこにいても、身近な水と緑が美しく心にしみ渡り、四季折々の豊かな表情、地形の変化による多様な景観や伸びやかな眺望を楽しめるような景観を目指します。



2つ目は、歴史が輝き、伝統が息づく景観を目指します。歴史的な建造物や町並み、文化財等を保全、活用しながら、くらしの中に歴史と文化の薫る景観を目指します。



3つ目は、くらしが潤い、まちが華やぐ景観を目指します。落ち着いた住環境や生き生きとしたまちの活力、にぎわいが感じられ、だれもが住み続けたい、訪れたいような魅力ある景観を目指します。

これら自然・歴史・くらしが一体となって調和する景観を目指します。



景観まちづくりは、次の基本姿勢により進めてまいります。市民は景観まちづくりに主体的に参加、活動し、事業者は景観まちづくりに積極的に協力、貢献し、行政は景観まちづくりを総合的に調整、推進いたします。これら多様な主体がそれぞれの役割に応じて積極的に協働し、地域の個性を活かして自然・歴史・くらしをつなぎ、誇りと愛着を育む景観まちづくりを進めます。



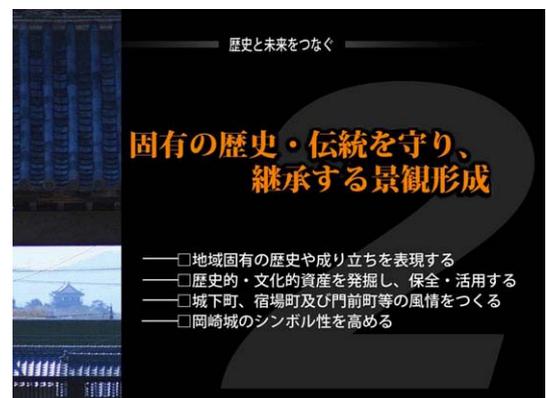
将来の景観像を実現するために、次の5つの基本方針を掲げ、景観まちづくりを展開いたします。



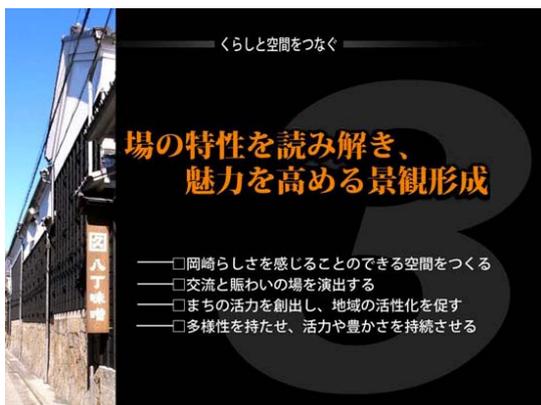
1つ目は、「自然とくらしをつなぐ」という視点から、豊かな自然環境と調和し、潤い安らぐ景観形成を図ります。



2つ目は、「歴史と未来をつなぐ」という視点から、固有の歴史、伝統を守り継承する景観形成を図ります。



3つ目は、「くらしと空間をつなぐ」という視点から、場の特性を読み解き、魅力を高める景観形成を図ります。



4つ目は、「個と全体をつなぐ」という視点から、周辺環境との関係性に配慮し、調和する景観形成を図ります。



5つ目は、「人と地域をつなぐ」という視点から、身近な活動を通じ、コミュニティを育む景観形成を図ります。



以上、景観まちづくりの基本的な考え方をご報告させていただきました。ありがとうございました。

基調講演（抜粋）



「景観まちづくりのヒント—地域資産（ヒト・モノ・コト）
を活かすまちづくり」

株式会社榭一市村酒造場代表取締役

セーラ・マリ・カミングス氏

岡崎と小布施をつなぐもの

私は岡崎に来たのは3回目ですが、残念ながら戦争でいろいろな被害に遭って、本当はもっともっとたくさん大切にとっておくものがあつたと聞いていますが、今あるものを大切にすれば、またそれがベースとなって、これから未来につながっていくものだと思います。

この岡崎と小布施をつなぐものは浮世絵でもあつたりします。小布施は、浮世絵で有名な葛飾北斎のゆかりの町でもありまして、北斎は晩年に今私の務めている蔵元を訪ねて、長い間滞在し、数多くの作品と傑作を描きました。この岡崎のまちも、たくさんの浮世絵に描かれた、とても印象的な矢作川の橋がありますね。私がかもしもここに住むならば、真っ先にその橋の復活ということを考えると思います。消えたものを復活するのはなかなか大変だと思いますが、大変だけにやりましょうということをお願いしたいと思います。

日本に来たきっかけ

私はアメリカのペンシルベニア州の出身で、大学時代からアジアに大変関心があつたので、日本語を習うようになりました。交換留学生としてアメリカに来ている方と親友になったことから、1年間交換留学生として日本に来ました。一旦は帰ったのですが、長野オリンピックの仕事があると聞いた時に、これは「一期一会」の出会いであると、このチャンスを失ってしまえば二度と同じチャンスは来ないだろうということで、ぜひ長野に行きたいと思いました。

オリンピックの仕事で最初に手がけたこと

オリンピックの仕事で最初に提案したことは、浮世絵に登場する富嶽三十六景の両国の橋の絵に登場する傘がインスピレーションとなって、世界中の国の人を迎える、150本の傘をつくりたいと提案しました。しかし、会社には却下され、また職人さんに提案しても、なかなか聞く耳を持ってはくれなかったのですが、京都のまだ若手の職人さんに何度も何度もお願いしたらOKの返

事をもらいました。でも会社はあいかわらずダメだという返事でした。ダメだというのは、バツ（×）なのですが、バツは前向きに転じればプラス（+）になる。だからどこまでやりたいかという気持ちの問題です。何かやるには必ず壁にぶつかるものなのです。私のわずかな貯金でしたが、全部その貯金を取り崩して傘を発注して、でき上がった時には、単に私が無茶なことを言っていると思っていたのに、実際できたんじゃないかということで、周りの人が驚きました。

小布施での取り組み①一蔵の再構築について

多分、私が小布施の酒蔵で働いていると開くと皆さんお嫁に行ったのではないかとと思われるかもしれないのですが、そうではなく、長野オリンピックの仕事を1年間やった後で、今の小布施町と出会いました。今勤めている会社は、せっかく江戸時代に葛飾北斎を迎えるほどの会社であったにもかかわらず、30年から40年間ずっと赤字会社で存続が難しくなっていました。長い伝統、文化があっても、経済的に成り立たなければ、やがて消えてしまいます。いつまでもあるべきものが、突然に消えてしまうことも日本には多いです、すぐには消えなくても、少しずつ色あせてしまって、だんだんと消えてしまうこともあるのです。

赤字の中、古い蔵を守っていくためにはどうしたらいいか、そのたたき台として社長が蔵を飲食店として再生する「プランA」を出しました。たたき台は実は大事なことです。提案があるまでは、みんなどうしよう、どうしようとなかなか動かないけれど、提案に対しては、欠点とかあるべき姿もリストアップできるようになります。

私は「プランA」に対して猛反対しました。レトルト食品と時間と手間をかけた手作りのお酒を出すお店だったからです。これではどっちが本当かわからなくなります。そこで「プランB」として、レトルト食品の店ではなく冷凍庫のない店にして、料理は旬の物だけを用意、すべて目の前で作ってくれるお店にして、「蔵部（クラブ）」という名前をつけました。

「蔵部」の庭の15メートルの大きなモミジの木はこの時植え替えました。この岡崎市をよくするには、もっともっと緑を増やしていけばどうかと思います。やっぱりお城の周りは圧倒的に美しいところがあるのですが、身近な生活空間や会社の周りも緑が増えてくれば違うなと思っています。

蔵をつくり直す前は蔵の前に自動販売機がおいてあって、お店に入らなくても用が済んでしまいましたが、これでは人と人のきずなは何も始まらないと思ったので、自動販売機の撤去を提案しました。最初はすごく怒られました。でも今簡単な道を歩むことで、将来性まで削ってしまうのではないかと、やはりもう一度リピーターを大切に、歓迎できる場所でありたいということを考えて、2度、3度と2週間ごとに少しずつ撤去をお願いしたら、何と、半年もしないうちに無理なく自動販売機を外すことができました。その時から、なるほどこれが「根回し」だったのかなということを感じました。結局、根をキューツとすぐに引っ張って移そうと思うと木が死んでしまうのですが、少しずつずらしながらやると、気づいたら植え替えることもできているということです。

蔵の前の自動販売機をなくすことは出来た訳ですが、なくすべきことだけを言うとなかなか人が聞いてくれません。「これ、ない方がいい」、よく言いがちです。本当は今の日本も、例えば電線を外していけば、もっと景色がよくなるでしょう。ただ、外し



たととしても代わりにどうするかを言えるようにならなければ、なかなか変わらないと思います。

小布施での取り組み②—木桶仕込みの復活について

岡崎は八丁味噌や昔の造り酒屋などがあるので、まだ木桶仕込みをなさっているところは残っていると思いますが、日本酒の業界に入ってみたら、2,000 軒の酒蔵があるにもかかわらず、1 軒も木桶仕込みをやっているところが残っていないことがわかりました。私は富嶽三十六景に登場する桶屋さんの姿が印象的で、そうした姿こそ小布施が守って残すべきことだと強く思いました。

そこで、木桶仕込み復活の試みを、NPO 法人として取り組んでいます。本来、酒屋で始まったものですが、味噌屋さん、醤油屋さん、漬物屋さんなど、後継者ができなくてゆくゆくは消えてしまうという共通の問題を抱えているところは、地域を越えてもつながりを持つとういうことで NPO 法人にしました。自分だけでは、あるいは桶屋さんだけでは、残すべきものは残らないですから、消費者の方々を巻き込んで、「この指止まれ」のように木桶仕込みを大切に思う方々、賛同してくださる方々の力を合わせていけば、何とか将来につなげることができると思っています。そこで、どうやって木桶仕込みを復活できるか、どうやって継続できるか、勉強会をしています。どうも日本に来て思うのは、戦後の日本は急成長が長く続いたために、大切にとっておきたい心はあっても、仕方がないではないか、もうやむを得ないのではないかと、次々と消えてしまうものがあるのです。でも、一人一人が一つでも消さないでいけば、気づいたら結構つながるものもあるというように思っています。

小布施での取り組み③—「小布施ツシヨン」について

一人でできることは限られるので、もう一度文化サロンを大切に作る寺子屋みたいなものを始めようとスタートしたのが「小布施ツシヨン (Obusession)」です。本来の寺子屋は読み書き計算などを教えるものですが、「小布施ツシヨン」は生きる道、もっと哲学的な、意欲を持つ、夢を持つ、目標をつくる、そうした目が輝く方々の集まりにしていきたいと思って始めました。やっぱり将来の若者の育成が大事なのです。この会は最初から学生は無料にしております。最初、学生で通い始めた人、信州大学に行っていた若者がいます。そうした若者が地域にパイプを持つことによって、就職内定までいった人は 10 人ほどいますし、またそういう若い人が今度は自分の家族を地域で育ててくれるような形になっています。

よく地方に人材がいないと言われることがあるのですが、人材はいます。ただ、地元で大切にされるかどうか、地方がそういう人と結びつけるかどうかだと思います。結びつけないとすれ違い、行き違いになってしまうけれど、チャンスをお互いにつくり出すことによって、結び合うことは可能だというふうに思っています。ハードのものはお金がかかるし、時間がかかるので、ハードは熟成しながら少しずつ変えていく必要がありますが、人が動き出すもの、イベントなどは即成でいいと思っています。時間をかける必要もないし、やり方によっては、それほどお金をかけなくてもできるものもあるわけです。

小布施での取り組み④－「餅ベーション」について

ある時、小布施で正月を過ごしてみたら、大勢の方々が蔵の前を通っているにもかかわらず、蔵が閉まっている。「明けましておめでとうございます」と言いながらも閉まってるじゃないか、これはシマッタと思いました。そこでボランティアでもいいから、餅つきで皆を歓迎する心を広げましょう、孫からおじいさん、おばあさんまで同じお正月を楽しみましょう、また、甘酒のふるまいをして、皆と少しずつぬくもりのある温かい気持ちになるお正月を過ごしたいということから「餅ベーション」を企画しました。動機つけのことを英語でモチベーションといいますので、これにかけています。

実は、最初の年は12月26日にやりたいということを決めたので、果たして私一人でできるのでしょうかという状況でしたが、こうしたことは、結局難しく考えると、何一つ始まらないので、何かやりたいと思ったら、いかに面白く、楽しむかという方向に動き出してみるといいように思います。また、日本に来てから、私は何をしても目立ってしまいます。目立つ杭はたたかれるということなのですが、悔いの残らない人生を過ごすのがお勧めだと思います。やっぱりいろいろな壁にぶつかって、あるいはたたかれたとしても、やれるだけやってみる。皆さんの先人の方々が一生懸命頑張ったことを考えると、まあまあこんなところにしときましょうということだけでは、やっぱりいられないというふうにも思います。

小布施での取り組み⑤－碧い軒（へきいけん）の保全について

小布施にも全国と同じような問題があります。今すぐ小布施に行けば、まだまだ伝統的な景観が残っていますが、今、それらにかかわる人を育てないことには、行く行くはこの姿は間違いなく消えてしまうものなのです。例えば北斎が使われたアトリエ（碧い軒）であっても、数年前に壊される話がありました。最初は町の教育委員会に相談したのですが、教育委員会も「大事に思っているけど予算がないのですみません」ということでした。でも、消えてしまったら二度と戻らないものです。同じ場所で使うことができないならば、曳家（ひきや）で引っ張って安全なところまで持って行って、再利用の方法を考えていこうと思いました。

幸い今の80歳代ぐらいの方で、戦前の日本の棟梁の仕事ができ、茅をふける人が地元いらっしやっただので、その方に来ていただいて、若い人にやり方を教えてもらいながら再生を進めています。若い人も葺き替え工事や茅刈りまで参加してくれるようになっていきます。自分たちには何もできないと思っても、少しでも代々伝わってきたものを将来につなげていくこと、それが極めて重要なことではないかなというふうに思っています。

小布施での取り組み⑥－瓦窯の再生について

自分たちは酒蔵として生き残りたいわけですが、同時にどんな日本と一緒に残りたいのかということも考えています。97年に蔵の再構築をする時から、昔の瓦が足りなくなって、非常に困っていました。このままでは間違いなく20年、30年後には昔の瓦はなくなってしまうに違いない、今つくらないことには将来なくなるということに気づきました。小布施にいぶし瓦のまち並みがなければ、今のような安らぎのある町並みではない。やっぱり、まちの藪（いらか）が町並みそのものになっていますので、こうしたものをどうにかして将来につなげていこうと思っているの

です。

現在、全国のいぶし瓦をつくっているところは、5カ所ぐらいだけになっています。小布施でも戦後1953年までは、いぶし瓦をつくるどころが2カ所あって、隣の町には8カ所もありました。岡崎ほどの城下町なら本来どれ程あったかわからないのですが、確かに近代化されることによって、こうした産業がどんどんと大都市から追い出されていきました。

この瓦産業を復活させようと思って、県庁に相談に行ったら19カ所の法律にぶつかるよ、もしやるならそれは、「針に糸を通すようなものだ」というふうに言われました。針に「縄を通すのではなくて良かった」と言ったら、「変な人」と言われたんですけどね。でも、できる道が一つあればいいんです。

それから、許可を得るために書類を出して手続きを進めようとする、ここは間違った言葉だからと返されて、もう一度書き直してということを繰り返すと、また2～3週間後にまた訂正がある。また2～3週間後に同じやりとり。気づいたら5年も10年もかかってしまいました。今年の2月ごろに許可がやっと下りたのですが、その間に地元で最後の鬼瓦を焼いていた方（鬼師）で、非常に元気のある80歳代の職人さんがこの世からいなくなってしまう。極めて残念なことですが、そうした先輩の魂を自分たちが忘れることなく、一度落とされたバトンを拾ってまでも、もう一度バトンタッチをしようではないかというふうに思っています。



小布施での取り組み⑦—1530（市ゴミゼロ）の日について

15日、30日にはゴミを拾う運動を数年前に起こしました。5月30日だけまちをきれいにしただけでは、なかなか保つことはできませんから、同じエネルギーを年間で振り分けて、汚くなる前にきれいに町を磨こうということです。本当は24時間いつでもまちを歩くことが安全で快適であることが目標ではあるのですが、小さな町で人が少なく、高齢化が国より早く進んでいる中では、1人が1人分の仕事じゃなくて、1人が8人分ぐらいの仕事ができるような工夫が必要になってきます。

町に今、道をきれいにする予算はゼロですから、町は掃除をやるだけで歓迎なのです。限られた予算はこっちから取ってしまうとあっちまで届かないということでもあるので、自分たちのまちを磨く、自分たちの周りをよくするのは、やって当然なことでもあるというふうに思っています。こうしたことは、ほかの海外のまちに行くと、かなりの頻度でやっていることなので、日本もやって当たり前だというふうにも思います。20年前に日本に来た時、日本ほど美しい国はこの世にないと思っていたのですが、先輩の方々がその伝統を守られていない結果、若い世代は、掃除は自分たちがやるものじゃないと思ってしまっている。一時の掃除の空白で今ポイ捨てとかが目立つような形になったわけですから、もう一度若い世代と先輩と結びつけることができれば、日本はまだ大丈夫だというふうに思っています。

小布施での取り組み⑧ー小布施見にマラソンについて

ミニサイズのまちを大事にしたいと思うと、足で歩くことが大事だなと考えたことと、ミニサイズのまちを、もう一度しっかり見てみようということから考えて、「見にマラソン」という名前をつけて、夏に「海のない小布施に波をつくろう」というテーマで、マラソン大会を立ち上げることにしました。

最初の年は警察に説明に行ったり、自治会に許可をもらいに行ったり、クリアすべき課題はいろいろあったのですが、たった3カ月で実行できました。よく「時間がないからできない」と言われますが、すぐにでも、だれでも10ぐらいできない理由は思い浮かんできますので、1年もあれば、その理由が多分1,000ぐらいまで増えて、どんどんと一つ一つの壁が厚くなってしまおうでしょう。そういう考えが固まる前に先に先にと走り出してやり遂げたことが成功のもとだったと思います。

この大会は、町の人口が14,000人くらいの中、ボランティアが1,400人くらい参加して運営しています。本当に今いろいろな大会、いろいろなあるべき姿の祭りが、スポンサーがつくつかないかによって継続できるかどうかになっていることを考えると、ゆくゆくはこの大会は参加費で賄うべき大会であると考えています。だから、自分たち民間もボランティアとなり、行政もボランティアとなって、この大会に参加するような形にしています。

これからについて

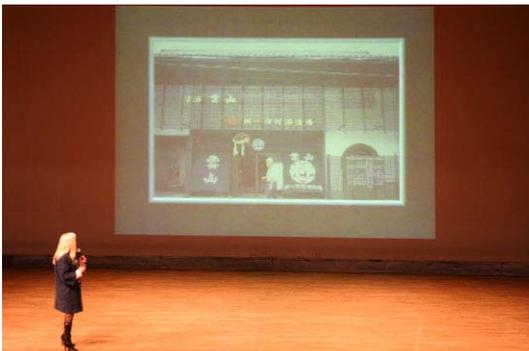
私自身がこうして20代、30代、日本で過ごして、これまで「アラシ（嵐）のような人」と言われていたのが、ようやく「アラフォー」と言われるようになってきました。でも、やっぱり20代、30代が一番未来に向かって時間を長く持っていますので、そういう人に如何にまちづくりとこれからのまちの構想に参加してもらうか、どのようなまちにしたいのか、を考えてもらうことが大事です。多分私みたいに生意気な人がたくさんいるかもしれないのですが、そうした若い力と先輩の力を合わせると、地域がより輝くものになります。お互いに力を合わせていけば、かなりのことができるものと信じています。

今、このような立場になって、若い人を歓迎できる立場になったからこそ、率先して人がやりたくない、あるいはやめてしまったものに楽しそうに積極的に取り組むことによって、若い人も巻き込んでいけたらいいなと思っています。

今ようやく農業に少し力を注ぎたいなというふうに思っていますが、この5年間、15年間ぐらい耕されなかった荒地を少しずつ、耕せるようなものにしてきました。そうしたものはなかなか

お金にならないから皆がやらないことなのですが、ただ先祖の、皆さんの先人の方々が誇っていた日本をつくるために、また下手な開発を防ぐためにも、おいしい食文化を保つためにも、そうした田園風景を残していくことは必要だと思っています。

残すのは、黙っていれば簡単に残るものではなく、生かされていなければやがて消えてしまうので、ほったらかしにしないで、ウィークエンド・ファーマーとして土日をかけて土に触れるような仕事を、で



きるだけ若い人も巻き込みながらしています。

皆さんの一人一人の運動と自らの頑張りが波となると思っています。1滴の水から物事が始まる。「水から」というのは「自分から（自ら）」ということです。これは人のことじゃなくて、自分自身ができることが多いということを理解していただければと思います。

【第2部】公開討論会（パネルディスカッション）

パネルディスカッションテーマ

『みんなで創り出すー住み良さをつなぐ 美しく風格あるまち 岡崎』



小 川

では、ただいまより第2部のパネルディスカッションを始めさせていただきます。

1部のセーラさんの非常に楽しい、私が言うとおやしギャグになるような素晴らしい日本語を含めてお話をいただきました。本当に元気をいただけるようなお話でした。

それに引き続きまして、私どもパネラーの方から、今日の小林部長が冒頭申し上げましたような景観づくり、景観まちづくりに対して関係の深い方々からご提言とかご意見をいただきまして、時々セーラさんにコメントをいただきながら進めさせていただきます。後半にはフロアの皆さんの方から少し質問を受け付ける時間があればと思っております。よろしく願いいたします。

早速ですけれども、もともと市長さんのごあいさつにもありましたように、景観法は平成16年にできた新しい法律ですが、岡崎市における景観の取り組みというのは他市町村に比較してもかなり早い時期から景観条例も含めてやっておられました。ただ、進み具合というのはそれほど目覚ましいものではなかったのですけれども、他市町村の動きを含め、今後の経済状況も含め、そして岡崎のビスタラインとか岡崎城だとか、さまざまな事業の中で、もう一度岡崎の美しいまち、誇りになるまち、風格のあるまちを目指そうではないか、もう一度リセットしてみたらどうだろうということで、景観計画の策定を今行政の内部で進めておられます。その中でさまざまな議論をしながら、小林部長が冒頭出していただいたような基本的な考え方をまとめております。

そこではセーラさんもおっしゃいましたように、新しいものをどんどんつくっていくというこの時代、今まであったかもしれませんが、もう少し今あるもの、既に私たちが手にしているものを、もっともっと大事にすれば、もっともっといいまちになるんじゃないか。それをもっと自分たちの目で見ましよう。

もう一方で、その優れた個々の資源、これをつながりをもって組み立てていかないと、個別の点だけではうまくいかないんじゃないかという議論をさせていただきました。もう一つは、セーラさん、本当に行政の力を借りないでということをおっしゃっていたのですが…。

セーラ

お金を借りないで、力は借ります。

小 川

力は借りるそうです。さすがに餅のイベントをやられただけのことはあると思います。

もちろん行政だけで当然できるわけではありませんし、市民の方々だけでもできません。事業者の方々の協力も要ります。そのあり方として、市長さんが就任当時からおっしゃっておられますように、みんなで協働してやろうではないかと。みんながそれぞれの役割を、それなりに果たしていこうではないか。そうしたことが単なる美しいまちをつくることよりも、本当の美しい、みんなが住んで良いという美しいまち、目で見て美しいのではなくて、心で美しく感じられるまちにしたらどうだろうという議論をさせていただいて、冒頭のような基本的な考え方として言葉でまとめさせていただいています。

もちろん先ほどの小林部長のお話のように、たくさんの絵、写真、スライドが出まして、本当に素晴らしいものが岡崎にはまだまだたくさんあると思います。こんなに優れたものが点在しているまちは、そうないんじゃないかなと私は思っております。

そういう中で今日は、市民活動を中心的にやっておられる三矢さんの方から、主として市民の立場から、そして太田さんの方からは、そういうまちづくりに建築家としておかわりになっている、その立場から。そして当然行政のトップとして岡崎市長の柴田さんからお話をいただきます。そして、今日おいでいただいた方も含めて私たちは何らかの形で岡崎市にかかわっていますが、岡崎に来られるのは3回目のセーラさんには、外から見た目として岡崎に何かもう少し提言をいただいたらどうかと、大体こんな組み方でやらせていただこうかと思っています。

では早速ですが、三矢さんの方から順番に、今、岡崎の景観、あるいはまちづくりについてどう見ているか。こんな問題があるのではないかとということから、自己紹介を含めて大体5分ぐらいでお話を伺っていきたいと思います。

では三矢さん、お願いいたします。

三 矢

岡崎まち育てセンター「りた」の三矢と申します。よろしく申し上げます。

自己紹介という意味では、僕は岡崎の生まれと出身なのですが、20代の大半を関東の方で過ごしてしまっていて、30代になって岡崎に帰ってきたと、そんな感じになっていますので、そういう意味では岡崎の古くからのことも多少わかっているつもりですし、一方で外から見た岡崎というのも少し意識しながら、日ごろまちづくりに取り組んでいるということになります。

岡崎まち育てセンター「りた」では、今、岡崎市内3カ所に地域交流センターという市民活動の支援施設があるのですが、それが岡崎の北部の岩津であるとか南部にある上地、そして前半戦のセーラさんの話にもたくさん出てきた矢作という地域があるのですが、そちらの方にもつながりがあります。そういったいろんな市民活動の支援拠点にかかわる中で、岡崎といっても非常に多様であるというか、北には北の文化があり、西には西の文化がある。そういうことを意識しながらいろんなまちづくりを進めています。

ちなみに、具体的には市民活動の支援だとかボランティア活動であったり、そういうことつなぎ役としていろんな活動をしているのですが、例えばの話、実は宣伝になってしまうのですが、2月の終わりの土日、27、28日に「りぶらまつり」という図書館交流プラザという大きな複合施設のお祭りを市民手づくりでやってみようという動きがありまして、そちらの実行委員会の事務局をやっています。昨晩も20代から70代ぐらいまで多様な方々が集まって、ああしよ

う、こうしようということを議論する場をつくってきたというようなことが挙げられます。

それと、今回の景観まちづくりといったようなことに関して、一つ印象深いものとしましては、岡崎には旧東海道の宿場町だった藤川という地域があるのですけれども、その藤川のまちづくりの中で、今ちょうどある歴史的な建物というか、要は野村さん宅なのですけれども、昔お米屋さんとして使われていた建物を、どうもオーナーというか持ち主の方も、できればこれを地域の財産として使っていいよみたいな、非常に好意的なオーナーの方がいて、一方で地元のまちづくり協議会の皆さんも、そういうのをぜひ一緒にやっという動きがあるのですけれども、そんなところにもちょっとかかわらせてもらっています。

実際にこういった景観は、もちろんいろんな議論はあると思うのですけれども、例えばそういった歴史的な建物を活用したとか、その風景、景観を活かしたまちづくりという意味では、そういう持ち主さんの意向が非常に大きいなと思っています。

まだ5分にはちょっとありますので、もう一つだけ触れさせていただきますと、今うちも先ほど言ったように市民と市民とか、ボランティアさんと地域をつなぐという活動もしているのですけれども、一方で市民と行政をつなぐような議論の場もいろいろとやっています。そういう行政さんといろいろと付き合わせていただいている立場から思うのは、こういった景観とまちづくりといったところにおいては、特に行政の縦割りみたいなものをどういうふうに越えていくのかというのが、意外と今後課題になるんじゃないかなと思っています。

具体的に言いますと、そういった歴史的なものとか文化的なものって、教育委員会だとか何とか教育課とか、そういうようなところが大体セクションとして持っています。例えば今日の場を主催したのは都市計画課というところがやっているということがありますので、そういった意味でこういった景観というちょっと包括的なまちづくりを扱う上では、こういった行政の縦割りをどうやって越えていくのか、そういうところも課題なんじゃないかなというふうに思っております。こんなところでまず最初のあいさつは終えていきたいと思えます。



小 川

どうもありがとうございました。

では続きまして、太田さんの方から、建築設計を業となさっておられますが、建築家としての目から、岡崎の景観のいいところも含めて自己紹介等お願いいたします。

太 田



皆さん、こんにちは。太田です。事務所協会ってわかりにくいと思いますが、設計事務所の業界の団体でございまして、設計事務所の集まりです。個人の建築家の集まりではなく、会社の集まりとして大体愛知県で40年ぐらいたっています。

特に私どもの憲章の最初には、「建築と環境が文化の形成に与える重要なファクターである。それを十分認識しなさい」と言われており、肝に銘じて皆

さん活動をしていると思っております。

私どもは市内でどのような活動をしているかというと、本業の設計の仕事もですが、奉仕活動としてここ4～5年、無料耐震診断のお手伝い、それから建築相談の窓口を受け持ったり、大工さん、左官屋さんたちの職業訓練校の中で法律を教えたりとか、いろんなことを教える講師の派遣も行っております。そして最近では、少しでもまちづくりにかかわっていこうということで、公共施設の跡地の利用とか、今後の岡崎市が計画されておるような施設について、少しでも私たち市民の意見を提案して、市民の使いやすいものにしていただけるように提案をさせていただいたり、民間の施設につきましての提案もさせていただく形で、業界としてやっております。

岡崎市内の設計事務所は、市内の9割以上の建物の設計をやっておりまして、設計事務所としてデザインというかまちづくりの大きな要因を担っていると感じております。

そして個人的な私どもの事務所も含めてですが、岡崎の設計事務所は、よく環境破壊だとか景観破壊だと言われる分譲マンションをやっている設計事務所が非常に多いわけございまして、三河地区の中で一番多いかと思っております。

皆さん、景観の中でマンションをすぐ目のかたきにされるわけです。ある時はひどいことを言われる時もありまして、「悪徳デベロッパーの片棒を担ぐ悪徳設計事務所」ということまで説明会では言われることがございますが、何も考えずにマンションをやっているわけではなくて、なるべく地元の中で、その地域の中で喜んでいただける形を何度となく検証しながら、設計もしておるつもりでやってきておりますので、その説明だとかその辺の私たちの業界のアピールするところも少し足りないかなとは思っております。

そして、市内の景観、なるべく建物は残していきたいと。基本的にはあるものも、まだ使えるものは使っていききたいと思っております。都市景観、風景ですが、景観の構成の中で建物にはそれぞれ皆さん、大家さんも、それなりの思いを持ってつくられた建物ばかりでありまして、景観を大きく損なっているようなものは、そんなにたくさんあるわけではないと思うのです。それよりも電柱であったり、電線であったり、大きい野立て看板であったり看板の方が、私は都市景観を損なっているのではないかと考えております。これからここ数年、皆さんと行政と事業者とで、よりきれいなまちづくりを、できる形を積極的に話し合っていきたいと思っております。私のあいさつは以上です。

小 川

どうもありがとうございました。

では、柴田市長の方から、行政のお考えも含めてよろしく願いいたします。

市 長

ご苦労さまでございます。市長の柴田でございます。私の方からは、岡崎市の景観の現状と課題について、まずお話をさせていただきたいと思っております。

私どもの岡崎市は、豊かな自然と、それからまた数多くの歴史的・文化的な遺産をたくさん有する西三河地域の拠点都市ということで、固有の伝統と風格を持っております美しいまちだということは、私が申し上げるまでもなく、皆様方ご案内のとおりであります。

そんな中で、昨年度実施をいたしました市民意識調査によりまして、「住み良い」とか「まあ住み良い」とご回答いただいた方が8割を超えておるといような状況でございます。市民の皆さんの多くが住み良いまちであるということを理解はしておっていただけるんじゃないかと思っております。



しかしながら、市の取り組みに対する満足度ということになりますと、市民の皆さんの多くが「都市の魅力が低い」というふうに感じておみえになるようでありまして、この魅力を感じない景観といたしまして、市街地の景観が挙げられると。都市の魅力をこれから向上させることが大きな課題ではないかと思っております。

住み良い、これは本当に全国の都市それぞれが調査をしております。なかなか住みやすい、住み良いと言っていた方が多くならないということで悩んでみえるまちもあるわけですが、一面そういうことでは私どもはいいところだなとは思いつつも、課題としてこのようなことがございますので、住み良いけれども、都市の魅力は低い。これはどういうことかということを追及していかなければいけないと思っております。

豊かな自然、固有の歴史、快適な暮らし、それぞれの要素はとても優れていると思うわけでありましてけれども、これらが一体となりますと、ちょっとぼけてしまって、景観としてはあまり魅力が感じられないというのも事実ではないかと思っております。

つまり個々の要素のよさや質の高さではなく、それらの相互の関係のあり方、これをうまくつなげていく、要素を調和させていく、そういう「関係のデザイン」、これが都市の魅力を向上させるために非常に大事なことではないかとも思っておるわけでありまして。

そして、何よりも大切なことは、やはり自分のまちの景観を意識し、関心を持つことだということにも思います。何気なしに住んではおりますけれども、市民の皆様がいま一度自分のまちに心を向けていただく、意識をしていただくことです。どうしても長く同じ場所に暮らしておりますと、そういうことが薄れがちになったり、見落とされたりいたすわけでありまして、いま一度気づいていただいて、関心を持っていただいて、そしてそのよさに磨きをかけていただく、さらに誇りと愛着を持っていただく、こういうことも大切な今日じゃないかと理解をいたしておるわけでありまして。

じゃどうするか、どのような景観まちづくりを進めていくかということでありましてけれども、

「良好な景観は市民共通の資産であり公益性がある」、このことをみんなで意識し合いながら、まちづくりを行う時代になった今、理念として「美しく風格ある岡崎の創生」、これを掲げて都市間の競争に生き抜いていくという今日ではないかとも思っておるわけであります。

ないものねだりだけじゃなくて、今厳しい財政状況の中でありますけれども、歴史や文化に寄り添って、独自の輝きを込めて、岡崎にしかない個性を活かしたまちづくりを進めていかなければいけないと、私どもも認識をいたしております。

そんな中で一昨年、“りぶら”がオープンをいたしまして、予想以上の年間160万人の方がご来場いただけるような状況になりました。あれも皆さんの知恵を出し合って、何度も何度も寄り添っていただいて、建築の設計の段階から、また活用の方法に至っても、みんなの知恵を出し合っただけの一つの大きな成果ではないかと思っております。「歴史と未来をつなぐ」、「くらしと空間をつなぐ」といった「関係のデザイン」におきましても、あの“りぶら”が今回の「愛知まちなみ建築賞」でも評価をされてもおるところであります。

松坂屋が退店をしたということで、あの周辺が今、火が消えたようになっております。今後どうしていくかということも大きな課題でありまして、これから地権者の皆さんや地域の皆さんとも相談をし、あの康生のまちをいま一度よみがえらせる、そんな施策もこれから景観の問題とともにやっていかなければいけない、そんなところだと思っておるわけであります。

いずれにいたしましても、市民の手によります市民のための景観づくり、これを行政と皆さん方と、あるいは事業者の皆さんが一体となって進めていかなければいけない、そんな大切な今日だというふうに理解をいたしておりますので、よろしく願いをいたしたいと思っております。私からは以上でございます。

小川

どうもありがとうございました。お三方それぞれのお立場から自己紹介も含めてお話がありました。

ここでセーラさん、再び登場です。3回目の岡崎ということですが、また景観という見方からして、小布施と比較して岡崎は城下町ですし、30数万人、かなり規模も違うと思うのですが、ご感想も含めて、ちょっとお話を伺えますか。

セーラ

先ほど建築家の方が悪気がないということをおっしゃったのですが、でも悪気なくても結果的に、建物を目立たせようとすると、どこからもお城が見えなくなってしまう。江戸時代、どこからでもお城が見えることという一つの方針がまちにあったことが、やっぱり立派な決まりであったと思います。お互いに空間を分かち合いましょうということが立派なスターティングポイントではないかなと思います。

昨年、光ビスタラインということで、大樹寺から岡崎城へ向けてサーチライトが照射されましたが、普段見えるつもりで見えていなかったりするので、再度その認識を市民の方々にも提供できたのではないかなと思うのです。

やっぱりいいまちづくりをするためには、人に遠慮が必要になってまいります。1階高くつく



ることによって、よりテナントがたくさん入ってお金が入るよりは、お互いに我慢しながら遠慮することで空間がつくられてくることでもあるので。こういうところ、あまのじゃくですみません。悪いと思うのですが、やっぱりこのまちは小布施以上に守られ生かすべきものが豊富にあるだけに、すべて高層ビルをつくっていけないとは言いませんが、地区を決めて、あとは建物が寿命になった時は壊す。例えば20年、30年後はこの空間がきれいになってくるようなことが可能となれば、もっとよくなるんじゃないかなと思います。ごめんなさいね、悪いけど。すみません（笑い）。

小 川

大学で建築を教えている私にも耳が痛い発言でした。

今セーラさんがおっしゃったように、空間を一緒に住んでいるので分かち合っていくましようという言葉は、非常に私には印象的に聞こえました。それぞれお立場の違いによって、自分の家、自分の会社、自分のマンション、たまたま仮住まいかもしれないけれども、お互いに住んでいる。その心の広がりを含めましよう。そういうことを先ほどの冒頭の景観計画の考え方では



「つなぐ」、「個人と地域をつなぐ」とか、「歴史と未来をつなぐ」というような形で表現させていただいています。

とは言え、どうやってつないだらいいのか。今、セーラさんは、高層マンションもどこかで必要でしょうが、ちょっと地域を決めたらとおっしゃいました。あるいは違う地域では何かルールが違ってもいいかもしれませんが、そんな仕組みをこれから考えていったらどうかなというふうに私も思っています。そうしますと、皆さん、市民の方々もその地域なり、あるいは違う場所なりで協力の仕方、考え方の違い、それがまたはっきり出てくるのではないかなと思います。とは言え、そのルールが、みんなが一緒に決めたものでなければ意味がないというふうには思っています。

そうなりますと、みんなが守るべきルール、もちろん江戸時代は暗黙のルールがあったかもしれませんが、お上のお達しがあったかもしれませんが、何らかの形でそういう議論を一緒に巻き起こしていく。そのためには市長さんがおっしゃいましたように、景観というのは難しい言葉かもしれませんが。感じとして固い感じなのですが、普段皆様が岡崎市を歩いたり、電車で通う時に、本当に目に見えるものですから、ここはいいなとか、ここはちょっとまずいなと、本当にわかりやすいものだと思うのですね。それをみんなで少しずつよくしていくということを心がけたいと思います。

いろんな立場の方が住んでおられます。景観といいますと、よくわからないという方もおられますが、一方で例えば一つの街角とか建物とか、先ほど太田さんがおっしゃった看板一つとっても、私は別にいいよと。いや私はとっても素晴らしいと思う。私はあれは大嫌い。好き嫌いの問題だからわかりませんとか、どっちでもいいんじゃないかという議論があるのですが、実は先ほど市長さんおっしゃいましたように、一人一人の資産、一つの会社の資産であっても公共のものだと。岡崎のまちをみんながつくる。その空間を分かち合っ子供たちへつないでいくというこ

とから考えますと、やはりみんながどうやって協働していくか、どうやって手をつなぎ合っていくかというのが大事だと思っています。そこをパネリストの皆さんに少しずつまたご意見を伺いたいと思います。

また三矢さんの方から、どんな形で協働が望ましくて、自分はどんな形でかかわれるのか。それに合わせて何かほかにご提案もあればお伺いしたいと思います。では、お願いいたします。

三 矢



景観として調和しているとか、連続性があるということと、今日の最初のプレゼンテーションにありましたように、個と全体がつながるとかというのは、つまるところ、人のつながりみたいなものをものすごく問われるなというふうに思っています。

ちょっと岡崎の話から少し離れてしまうのですが、宿場町つながりで、有松という地域が名古屋市にあるのですけれども、有松のまちづくりの取り組みに少しアドバイザーとしてかかわっていて、そこで地元の人とやり取りをしていて、すごく印象的だなと思ったのは、本当に人がつながっているということです。きっかけとしては、実はちょうど今年が名古屋開府 400 年ということで節目の年ということもあるので、有松のまちを今後とも守り育てていこうと、おおむねそんなようなまちづくり憲章をつくろうという動きが地元で起きて

いるのです。その時に地元のそういったまちづくり活動をされている方々と作戦会議を開いて、どういうふうにしてまちづくり憲章というか、自分たちのまちの方向性をつくっていくのかという時に、一地元にとっては意外と突飛な提案だったかもわからないのですけれども、僕は少なくとも子供たちを巻き込んだ議論にした方がいいんじゃないかと。

例えば、こういった良好な地域であるだとか、歴史的な風景であるだとかいったものが、今それを理解して、これはいいものなんだというふうに思っているある一定程度の年齢の方々がいることは、それはそれでももちろん大事なんだけど、それが後世に伝わっていくためには、子供たちがそこに興味を持ったり、そこにかかわったりということがすごく大事なというふうに思っています、そういった子供たちと一緒に例えばまちを一緒に歩いてみようとか、そんなような仕掛けからやってみました。

その時に、そのまちづくりの会のある代表の方に、「こんなことをやってみたら面白いんじゃない？」と言ったら、「ああ、じゃぜひやってみましょう」という話になって、PTAのお母さん方が次の会合に現れるとか、実際の集いには校長先生も生徒を引き連れていくらかのぞきに来てくれるというような関係がありました。

そんなふうにして、地域のあるまちづくりの会が、ちょっと学校の方に声をかけた時に、校長先生のキャラクターにもよるのかもわからないのですけれども、校長先生がひょいと腰を上げてくれる。そういう地域のまちづくり活動とそういった子供たち、さらには教育機関とか学校みたいなものが、どういうふうにつながっていくか。そこがつながっていくと、景観づくり、風景づくりといったような議論は、すごく大きな動きになるのかなというふうに思いました。

それと、セーラさんの話の中で瓦の話が出てきたり、木製の樽の話が出てきたりしたのですけ

れども、ああいうものというのは、問題が顕在化するころには本当に致命的なことになってしまいます。特に有松に出入りさせてもらって余計に思ったのですが、実際に地域の話や問題になるころには、たくさんのお金とたくさんのエネルギーをかけないと、この建物は守れないとか、物が守れないという話になるのですけれども、恐らく一番理想的なのは、もう少し早い段階というか、要するに30年放置しといて、いざ困った時にお金と労力をかけるんじゃなくて、もう少しコンスタントに、1年置きとか2年置きといった短いリズムで植物に手を入れるように、建物に手を入れるということをやらないといけない。

先ほどの瓦でも、職人さんというか、それを守る技術を持った人がいると思うのですけれども、そういう技術を持った人が食べていけるためにも、ある程度のリズムで仕事がないと、「やっぱり仕事やれないから私やめます」みたいなふうになっていって、技術がなくなる。景観を守る技術がなくなることによって、じゃしばらくできないなとって30年たってしまうと、またお金がかかるようになると余計に仕事が出せないという悪循環があるような気がします。

ちょっと僕の話は大きくなっちゃうのですけれども、そういった景観とか景観を守る技術みたいなものを想定すると、そこには職人さんが存在してくるので、その産業というか仕事づくりというか、そこで仕事が発生するというのと、まちをケアし、メンテナンスをし、景観を維持するという行為がつながっていかないと、持続可能じゃないなと思いました。以上です。

小 川

有松の事例を含めて、たくさんご提言いただきました。
太田さん、次にお願いします。

太 田

景観という非常にソフト的に理解してもらいにくいことでもありますし、住んでいる皆さん、市民の皆さん、なかなか啓蒙活動といっても難しいのですけれど、その辺の考え方というのが少しでもテンションが上がってこないといけないのではないかと。例えば小布施でやってみえるように、「外はみんなもの、内は自分たちのもの」というように、外は個人じゃないという意識がもう少し出てくるように考えていかないといいかなと思います。

例えば、せっかく紅葉のきれいな街路樹を整備しても、紅葉の一番いい時を見られずに剪定がされていくという現状があります。落ち葉が嫌だと2~3人が言うのと、すぐ切られてしまう。その辺、岡崎市という歴史ある都市で、もう少しみんな考えようかというところから、少し、てこ入れもしていかないといいのではないかと思います。

そして、先ほど小川先生の言われた、早く「空間を分かち合う」ことを踏まえて、「地域のルールや仕組み」を決める必要があるというお話。これは机上でやるよりもフィールドでどんどん進めていくことが必要だと思います。皆さんの、特に地権者の意見、ご理解がないと、これはできることではないし、十分理解がないと後で勘違いとかがありますし、この辺も十分理解をして、どんどん試行錯誤してやっていかれた方が早く進んでいくし、先ほど三矢さんの言われたように、



費用の面もかからないのではないかと思います。

具体的な失敗例じゃないですけど、例えば駅前ロータリーの中に木造の専用住宅があるというような景観というのは、あまりふさわしくないのではないかと。もうちょっと地権者のご理解を得て、岡崎の駅前らしい施設づくりをする。その辺のご理解をもうちょっと丁寧にやっていく必要があるのではないかと思います。

そして、景観地区ということで、昨日新聞に出ておりましたが、芦屋でマンションが許可にならなかった。岡崎ではたくさんあるような5階建ての6戸並びぐらいのマンションが、景観的にふさわしくないと。その判断基準につきましても、明確に判断基準を出していく。具体的にいろんなものを出していくことによって、景観も守られていくし、景観も早く形成される。小布施ですと、かなり細かいところまで景観について指摘もしておりますし、アバウトな、ざっくりした、おむねこんな感じというのじゃなくて、どんどん判断の線を引いていくという必要性もあるのではないかと思います。

今から考えて2～3年後に条例を出してとかいうことではなく、なるべく庁舎内でやらないで、地元と出すことが大事だと思います。ワークショップをやるとか、いろんなことでやっていくべきだと思いますし、私ども業界、特に事業者関係は非常に仕事に密接な関係にもありますし、設計事務所だけではなく、デベロッパーさんも踏まえ、ハウスメーカーも踏まえ、どんどん意見を集約していく必要があるかと思えます。事業者というのは必ずルールは守ってやっていきますので、非常にその辺はやりやすいかと思えます。なかなか難しいことですが、その辺も踏まえて私たちが業界として協力はしていきたいと思っております。

小 川

ありがとうございました。具体的に市民の皆様の声も聞きながら、早く動いてみたらどうかというようなご提案だったかと思えます。

では次に市長さん、お願いいたします。

市 長

貴重なご意見をありがとうございました。ただいま三矢さんの方からは行政の縦割りというのが非常に課題だということをおっしゃっていただきました。今までもそのことについては取り組んでおりますが、やはり横の連携をきちっとして、もちろんこの問題についての主体はこの部局であるけれども、それについての横のそれぞれの部署から代表を選んで検討会を開くというようなことは、今役所の方でもやらせていただいているところでありますので、これからもそういう縦割りの問題が出ないように、一生懸命やっていきたいというふうに思っております。

それから今、建築の話がありました。マンションが建ちますと、必ず地元の皆さんから反対運動が起きるのですよね。実は私どもも、まちづくり条例というものをつくってありまして、建築業者の方々と市民の皆さんの間に入って、それを調整していくという役割を今果たして、できるだけ事業者の皆さんにも地元の地域の皆さんにご迷惑がかからないような計画の変更をしてくださいということを指導いたしております。そんな中で随分とそれに基づき変更もしていただける部分も多くなってまいりましたし、また進入道路も6メートル、9メートルなきやいけませんよとかいったようなことも指導するようになりました。

ところが、どうしても反対というような方もお見えになられまして、それを「市長、おまえさんがやらなかったら承知せんぞ」と来るのですが、しかし、日本は法治国家なものですから、そ

れじゃといって「業者さん、それはやめてください」というふうにやりましたら、今度は私の方に損害賠償というようなことで来てしまうというのが事実でございまして、そのせめぎ合いのぎりぎりのところまで今やっている状態でございます。



したがって課題は多いのですが、時間をかけて、できるだけそんなことも一生懸命やりまして、また今、指導指針をつくってというようなお話もありましたので、そんなこともこれから適宜対応ができるようにしていかなければいけないと思っておるわけでありませう。

今後どのような景観のまちづくりを進めていくかということにおける計画策定のスケジュールでございませうけれども、協働ということで、特に景観まちづくりにおきましては、主体的に参加、活動する市民の皆さんと、同時にそれに積極的に協力、貢献をしていただく事業者の皆さん、これが一体となって進むために、行政の役割は「景観まちづくりを総合的に調整し、そしてまた推進をする」、こういう立場だということと私どもこれからも進めていきたいというふうに思っております。

協働の環境づくりでございませうけれども、まず市民の皆さんが主体意識を持って景観まちづくりに取り組んでいただけるような機会や場所の提供をしていこうということ。そしてまた、市民意識調査の結果も踏まえまして、3つの形でひとつ景観計画に盛り込んでいこうということとあります。

1つは、景観上重要な建築物や樹木の保全と活用を図っていこうということ。2つ目には、景観まちづくりの目標や方針を示していこうということ。そして3つ目には、建築物や看板のルールを定めて、必要な規制や誘導を行っていこうということと、景観計画の中に盛り込んでまいりつもりでございませう。非常に難しい事柄も出てくると思っておりますが、十分話し合いをし、調整をする中で、このことを進めていこうということとあります。

例えば、役割のうちで「調整」という観点ではいろんな問題があります。例えば先ほどから出ておりました大樹寺から岡崎城を望みますところの歴史的眺望（ビスタライン）の地域、この重要な地区では、きめ細かく建築物だとか、あるいは看板のルールを定めまして、必要な規制、誘導を図っていく、こういう調整をしていかなければならないと思っております。

それからまた「推進」という意味では、啓発や助成などの支援方法も今検討中でありませう。金沢のまちへ参りますと、古い景観がきれいに整備されているところが目に入ると思っておりますが、あそこもたしか道路に面したところの古い建物の、ここは大事にしなきゃいけないなというところについては、個人の建物あるいは寺院の建物なものですから、そこには全部補助金というわけにはまいりませうので、道路に面した部分だけひとつ助成をさせてもらって、これをいい形で維持していける方法にしていこうというようなことも進めておられるようでありませう。

いずれにいたしましても、これからパブリックコメントなどを実施いたしまして、23年度からの運用開始の予定を今いたして進めてまいりたいと思っております。

いずれにいたしましても、固有の景観はかけがえのないものでありませうので、市民の皆さんと一緒に、この活動がこれからも進んでいくように努力をいたしてまいりたいと思っております。以上でございませう。

小 川

どうもありがとうございました。

それぞれのお立場から、さまざまなつながりをどう仕組んでいくか、どう仕掛けていくか、どんなことが必要かというコメントをいただきました。

またここでセーラさんにご登場いただきます。いろいろな活動、本当にたくさんのことやられているセーラさんから見ると、行政とか、市民とか、事業者とか、いろんなつながりの形があるかと思います。今のお三方へのコメントも含めて、こんなふうにしたらもっと楽しくやれる、こんなことがあったらもう少しみんなが我慢して、いいまちができると、何かコメントをいただけたらと思います。



セーラ

ありがとうございます。やっぱり若い世代が技術伝承できるようにするために、継続的に仕事を発注するのは非常に難しいところです。小布施に来て以来、ほとんど毎年のように現場を持っています。現場を持たないで職人さんに仕事の空白ができると、せっかく力がついたところが outpour (流れ) されて、どんどんとできるものができなくなってしまうようなところがあるので、もうやるしかないというところなのですが。

あと、緑を増やす、あるいは紅葉を楽しむというのは、単純なことですけど、簡単にできるのにやってない。今年の紅葉から市長さんが決めればできることと確信しています。

長野県でも長野市でも、紅葉前に葉っぱを取ってしまうところがあるのですが、小布施は落ちた葉っぱを拾っている姿自体がサービスの1つだとしていて、それは人を歓迎する心のもてなしそのものです。あと修復工事自体もこれは出来上がっていないものという捉え方ではなく、むしろそのプロセスをお客さんと分かち合うこと自体が、町に来ていただく価値の1つでもあると思っています。

例えば今、姫路城が5年間修復工事を行っています、漆喰の塗り直しやすべてが隠されて見えない形になっています。でも昔の浮世絵を見ると、瓦屋さんが瓦を投げているような姿があったりする。小布施に来ると、その姿までお客様は分かち合えることができることも、やっぱり生きているまちだなと感じてもらえることです。でき上がっているものよりは、いつも修正しながら直していくものだというのが魅力の1つでもあるのではないかなというふうに思います。

また、落ち葉がある時に、さっき話した道路の掃除機を購入すると、簡単に吸い込むこともできるからお勧めなのですが。

簡単そうにできることは、簡単過ぎて考え直した方が良かったり、難しそうに見えたものでも、どうやってできるかを考えることが大事です。岡崎を見ると、一番まちをよくできるのは、もちろん橋をつくることでしょうけど。でも、今あるもの、例えば大きな建物で目立ってしまうものは、より控えめの色にして目立たせなくしてしまうとか、あるいは高い緑の木で隠す方法もある。できた建物は今すぐに消えるものじゃないですが、より住み心地のいいものに修正していくことはできるでしょうから、緑を増やして、道路の掃除機を購入して、まずは橋をつくってください。しつこいけど、物事が進むのにはしつこさが必要です。

【質疑応答】

小 川

市長さん、矢作橋で困ってますね（笑）。でも、セーラさんもパネリストの皆さんもおっしゃったように、最初の一巡目のパネリストのご意見の中でも、空間を分かち合うみたいな言葉がありましたし、今はそのプロセスを分かち合おうとか、みんなでやればやれないことはそんなになんないんじゃないかとか、もっと元気出してやりましょうよということだと思えます。道路掃除機は買えるかどうか知りませんが、そうやっていきたいというふうに思います。

こういうパネルディスカッション、いつもの常でなかなか時間がないのですが、せっかく皆様おいいただきました。今日、1部のセーラさんの時にはもっとたくさんの方がお見えになったのですが、岡崎で「景観」という固いテーマでこんなにたくさんの参加者が来られるというのは、私は非常に素晴らしいことだなと思っていますが、きっといろいろなご意見とかご要望、提案等お持ちだと思います。とは言え、時間がないので、何人か手を上げていただいて、ご意見をお願いしたいと思います。私の方からこの方お願いしますと申し上げますので、お名前を言っていただき、もしこの方にお答えいただきたいということがあれば、お話ししていただいた上でご質問をしていただけますでしょうか。

では、どなたかから。どうぞよろしく願いいたします。たくさん手が上がりました。本当にいいことですね。じゃ、そちらの方からすみません、お願いいたします。マイクが回りますのでお願いします。

質問者 1

失礼します。私はセーラさんの「じじ会」じゃなくて、藤川の総代会の会長をやっております。柴田市長さんに伺いをしたいと思います。

私ども藤川というまちは、東海道の宿場町でございました。現在も松並木が残っております。平成8年に国の歴史国道にも選定されておまして、私どもも藤川まちづくり協議会を組織しまして、歴史を踏まえたまちづくり運動をやっております。

今年度、すなわち平成21年度ですけれども、江戸時代の終わりころに建てられたと推定されます町家、昔、米屋さんをやっておまして、非常に盛況だったと聞いておりますけれども、その町家を所有者の方のご厚意によってお借りすることができました。

その町家でいろいろな先生方、今ここにお見えになるコメンテーターの小川教授、それから「りた」の三矢先生等々著名な方をお招きしながら、町家をどうやってうまく活用していくのか、そんな勉強会を始めております。さらにその町家を一般公開したい、そんな取り組みも現在進めているわけでございます。

ところが、この町家は、だんだん少なくなってきたわけでございまして、決して文化財でもございませぬので、何か価値がないようすけれども、私ども藤川に住んでいる者は、それらを後世に残していきたいと考えています。地元ではかけがえのない地域の資産である、こんなふうに強い認識を持っておるわけでございます。ところが、この町家というのは個人所有で、だんだん老朽化してきておまして、それを保全、修理するというのがなかなか大変であるというふうに所有者の方々からも聞いております。

そこで、市長さんにお伺いしたいのは、先ほどセーラさんが、「行政からは金は要らなくて力だけ欲しい」ということを言われましたけれども、私どもはちょっと欲張っておまして、力と若干の支援が必要であると。もちろんおんぶに抱っこということではなくて、額としても応分のそういう資金集めもしていかなきゃいけないなと思っておりますけれども、他の地域でやっており

ます景観まちづくり、こういうものによって修理費の一部を何とか助成していただけるような制度はないものだろうか。このことを市長さんにお聞きしたいと、こういうことでございます。

市長

ありがとうございます。藤川地区のまちづくり協議会ということで、大変地域の文化遺産を大切に活動にご専念をいただいておりますことを感謝しております。

私どもも、民間と行政が行うという一つの景観まちづくりは、大事な事業であるというふうに認識をしております。そんな中でそれを進めるために費用の一部を助成する、こういうことは非常に意義があるというふうにも思っております。

金沢市の例もあります。まだ岡崎市ではそこまで踏み込んだことはやっておりませんが、このたび景観計画の策定ということもございます。景観上、重要な建築物として市の指定を受けたもの、あるいは重点的に景観まちづくりを進める地区内で定めたルールに従った適合する建築行為、こういうことに対しましては、「規制あるところに支援あり」という考え方のもとで、規制の誘導と併せて支援制度もひとつ検討をしていかなければいけないと思っております。

特に歴史ある建物などが景観上重要な役割を果たす場合には、その建物の維持保全には老朽化に伴う修理と所有者の方個人へのかなりの経済的な負担が生じてまいりますので、景観重要建造物、これへの指定など前提条件はありますけれども、景観まちづくりという観点からは、個人所有の建物への支援も一定程度は必要だというふうに理解をし、これからひとつ勉強をしていきたいというふうに思っておりますので、よろしく願いをいたしたいと思っております。

藤川でそうしたことが進みますと、また全市の各地でそんな話も出てまいらんじやないかと思っております。限られた財源でございますので、重点的なところからそうしたことに手がつけていける形が進めていけたらと思っております。

特に藤川、岡崎城周辺の八帖だとか、あるいは康生、ビスタラインの大樹寺だといったようなところがまず優先するかとは思いますが、これからもひとつ皆さんと一緒に進めてまいりたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

セーラ

すみません。一つだけ加えたいのは、文化財ではないとおっしゃったのですが、これから50年以上歴史のある建物は、全国どこでも重要ではないけど文化財として申し込むことができるので、ぜひ教育委員会に行ってください。図面化されたり、また少し税金を安くできることもあるので、少しは助かるかなと思っております。

ただ、重要文化財ばかりがまちの顔になるよりは、普通の町家がまちの誇れる雰囲気にもなるので、ぜひ大事にしてください。お願いします。

質問者 1

ありがとうございます。セーラさんの貴重なアドバイス、ありがとうございました。

セーラ

また学生さんとか、建築家の学生やいろいろな若者の力を引っ張ってくれば、だいぶ安く収めることができると思います。よろしくお願いします。

小 川

たくさん声を伺いました。じゃ前の女性の方、すみません、お願いします。

質問者 2

岡崎市へ移り住みましてから40年たちました。岡崎が大好きで、これからずっとこのまま一生終わりたいと思っています。セーラさんのお話、とっても素敵でした。

ちょうど去年8月に小布施へ伺いまして、とっても心地いいまちでした。8月で暑い日でしたけれど、いつまで歩いていても飽きない。さっきおっしゃったみたいに、特別ここだけを大事にしているのではなくて、まちの普通の方が普通に生活してらっしゃるところもお訪ねしまして、心地いいまちだなと思いました。

さて、私は柴田市長さんに質問がございます。セーラさんにも皆さんにも自慢したいことは、岡崎は「川の文化のまち」だと思っています。「川と山のあるまち」って、私はそれで岡崎が好きになったのですが、造り酒屋さんも3軒あります。1軒は後継者がいなくなりました。八丁味噌は新潟の方から船で豆を運んで、だから川沿いのところに八丁味噌の工場があります。それから、三河湾でとれた塩は古鼠（現豊田市）まで船で運んで、その先が中馬街道といって塩尻まで運ばれている。非常にいろんな歴史があります。

その川、もう一つ自慢できるのは、2つの大きな川があります。それが市街地で飲料水として取水されて、市民の飲み水になっているのです。これも私はよそにはない、素晴らしいことだと思うのです。川の水に気をつければ、私たちはとってもいい水が飲めるのです。

景観まちづくりで身近なところだけではなくて、私の大好きな三方が山に囲まれています。これはほとんど水源地なのですが、ところが最近、その水源地が、非常に林業の衰退ということもありまして、風力発電とか、最近大きな問題になっていますトヨタのテストコースとか、そういうのでつぶされようとしているのですね。

エコロジーなのかエコノミーなのかを決定しなければいけないのは、これは市長さんお一人なのです。テストコースの方はまだ詳しいことはわかりませんが、風力発電は、市長さんのご意思一つでできるかできないかが決まってしまうのですね。水源地なのです。そこら辺のところを私たち市民は、あまり知らない。知らせてもないというところ、大きな景観の1つということで、ひとつ考えていただきたいのと、市長さん自身は、どちらを選択なさるでしょうか。

市 長

ありがとうございます。おっしゃっていただきましたように、川の水を利用して水道水、50数%を岡崎市は自己水で賄っております。その源が乙川の上流と、もちろん矢作川からも取水いたしております。

今ご指摘のありますのは、たしか山の方で巨大風車を建てている、あの発電の話でございますよね。

質問者 2

2,500キロワットの高さ135メートル、それが20基。まださらに10数基という、旧額田町を総なめにする風車の計画があるということを、私は掌握しております。

市長

ああ、そうですか。私どももそれをお聞きしておりまして、まだテスト段階でやっている状況だということを聞いております。届けはもちろん出ておりますが、そのことを認めるか認めないかということは、それは諸般の事情があります。少しでもそれが害になる、影響するという、地元からも反対の署名も上がっております。最初は賛成の署名が上がりまして、また反対の署名が上がってまいりました。地元がどうしてもいけないというものを、私がやりなさいと許可するわけにはまいりませんので、やっぱりそれはよく調査をいたしまして、決して害がないということならともかくとして、少しでもいろいろ問題があるということになれば、それは岡崎市は事業許可をいたしませんので、よろしくお願いをしたいと思っております。

質問者 2

はい、こちらこそよろしくお願いたします。

岡崎の市街地から車で5分も走れば、昔ながらのひなびた風景が広がっているというところがとっても好きで住み続けているものですから、今の市長さんのお言葉、大変ありがたく思います。どうぞよろしくお願いたします。

小川

ほとんど時間がなくなりました。遠目でわかりませんが、今日、若い人はいないですね。

セーラ

気持ちが若ければ。

小川

気持ちが若ければいいですから。気持ちが若くて手を振ってみえる方、じゃそちらの方お願いします。最後の一人とさせていただきますので、お願いします。

質問者 3

ありがとうございます。私は岡崎に住んで20年なのですけれども、今日のセーラさんのお話の中で一番印象に残ったのは、人間の五感を大切にしたいということで、実際に自分の体を使って表へ出てみるというところなのですね。

私は絵を描くことが好きでして、自分だけでしたら、それこそ何もない田んぼ道へ出て行ってスケッチするだけでも1日楽しめるのですよ。今の時代、なかなかバーチャルで何でも済んでしまうので、五感を大切にしたいという行動は非常に減ってきていると思うのですね。それが健康のことにも直結していますし、人間の文化というのも健康があってこそ成り立つものだと思うのです。

提案というか、私の理想の岡崎、将来ずっと岡崎に住み続けるかどうかということにも、私の中にもかかっているのですが、今これから恐らく岡崎の中で自然の大切なところ、それから史跡ですとかそういうところを拾い上げられると思うのですけれども、そういったところをぜひ有機的に結んでほしいなと思うのです。

岡崎は基本的には車がないとどうしようもないまちです。車がどうしても必要なまちだと思うのです。そこを車を降りて散歩するですとか、セーラさんみたいにマラソンなんかも面白いと思いますし、自転車で回るとか、そういった駐車場を確保しておいて一步降りて行って、そこから楽しい活動ができる場所。岡崎に来る人みんながそういうことをしたいと思うような環境づくりができれば、それが一番私はいいことだと思うのですね。ですので、そういったことをぜひポイント、ポイントだけではなくて、そこを線で有機的に結ぶというところを念頭に置いていただきたいというのが私の要望です。よろしくお願いします。

小 川

はい、ありがとうございました。約1名、セーラさんが拍手をいたしました。

特にパネリストの皆さん、コメントとか、いや違うとか、大賛成とかありますか。よろしいですか。

市 長

一生懸命そんなことも含めてやっております。「森の駅構想」もそんな形です。だから市民の皆さんにわかりやすく、ここここの拠点がこう結ばれるよと。あるいは車をここに置いて、ここここを歩いたらこうですよといったようなことが、具体的に新しくお見えになった方にもわかるような施策を進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

小 川

市長さん、ありがとうございました。

先ほどの「小布施見にマラソン」ではないのですが、自分たちでこういうふうに乗を置いて、こう歩いたらいいというルートを皆さんでお考えいただくと、もっと総合的調整推進の立場にある行政としては助かると思います。ぜひご提案いただきたいと思います。

一応4時半で終了予定ですが、ほとんど時間がありませんので、質問はこれぐらいにさせていただきます。男性、女性、そして若い方と3名ご指名させていただきましたけれども、そもそも皆さんがそういう関心を岡崎市に持っていただいたり、川の文化も含めて愛着を持っていただいている。そういう方々が一人でも増えて、少しでも自分たちの手や足や頭を使って動いていただけましたら、岡崎は本当にたくさんの資源があるまちですので、もっともっと素晴らしいまちになっていくはずですよ。

先ほどセーラさんもおっしゃいましたが、一緒に住んでいるまち、一緒に働いているまちですから、一緒に住み分けてもいます。自分たちだけの、自分だけの空間でもない、時間でもないということ。そして、たくさんの理解して協力してくれたりする人たちがいるはずだということに期待をかけて、これからの岡崎市、美しいまち、そして風格のあるまちに向けて、皆さんと一緒に進めさせていただきたいと思います。

冒頭、都市整備部長がおっしゃいましたように、景観計画という形の非常に固い景観法に基づく仕組み、ルール、これから行政の内部を含めて市民の皆様の声聞きながらまとめさせていただきます。太田さんの方から、なるべく早くそういう見えやすい、わかりやすいルールをとということもあったと思いますが、また皆様のお声を聞きながらまとめさせていただきますので、ぜひともご理解とご協力をいただけたらと思います。

短い時間で、セーラさんの話ほど魅力的ではなかったかもしれませんが、これでパネリストの皆さんからの提言も含めまして、終了とさせていただきます。ありがとうございました。

閉会あいさつ

岡崎市副市長

加藤 邦彦



副市長の加藤でございます。本日は長時間にわたりまして、景観まちづくりシンポジウムにご参加をいただきまして、まことにありがとうございました。

また、今日は壇上にいらっしゃる方々から本当にさまざまな印象深い話を聞くことができました。基調講演をいただきましたセーラさんの方からは、小布施町におきます非常に独創性のある数多くの取り組みにつきましてご紹介をいただきました。私自身も、もうかれこれ15年ぐらいになるかと思うのですが、小布施を何回か訪れたことがありまして、当時から非常にまちづくりの関係では有名なまちでございました。

あそこは宮本忠長さんという建築家の方が、マスターアーキテクトとして市の公共施設とかそういうまちづくりに非常に深く関与されておりまして、そういったことで本当に訪れて何回もまた来たくなる、そういったまちが形成されておったわけでございます。

先ほどセーラさんに、「最近、宮本先生いかがですか」というふうにお伺いしましたら、ちょっと体調を壊されたといったお話もあったわけでございますが、そういったことがあっても、またセーラさんのように本当に情熱のある若い方が小布施の中で頑張っておられるということを実感できました。また、小布施というまちは、そういう意味では本当に運のいい、幸運なまちなんだなというふうにも思ったわけでございます。

パネルディスカッションの方でも、さまざまなご指摘、お話がありました。小川先生の方からは、全体の進行をやっていただきますとともに、ご紹介の中にもありますように、岡崎市の都市計画行政に対しまして、日ごろから本当にご尽力をいただいております。そういった立場からも空間を分かち合うことの大切さ、あるいはプロセスを分かち合うことの大切さ、そういったご指摘をいただきました。

三矢さんの方からは、有松におきます事例を紹介していただく中で、人のつながりの大事さ、あるいは雇用も含めて持続性、景観行政をきちんとやっていくためには、そういった持続性が重要だと、そういったご指摘もいただきました。

太田さんの方からは、太田さんは今日は業界からの代表ということでございまして、日ごろ設計に携わっていらっしゃる方の苦悩といいますか苦勞が、言葉の端々にあったわけでございますけれども、とにかく最後は業界として協力していきたいといったお話がございましたので、非常に安心をしたわけでございます。

それから柴田市長さんの方からは、市の景観の現状、課題についてから始まりまして、今後どうやって景観まちづくりを進めていくのか。あるいは現在策定中の景観計画の内容、あるいは今後のスケジュールにつきまして、お話をいただきました。そういった基本的な考えのもとに私も景観行政にこれから取り組んでいきたいというふうに考えておる次第でございます。

今日の話の中で、何回か「外から見た岡崎」という話がございました。私も実は生まれ育ちは岡崎ではございませんで、約2年半前にこちらに参ったわけですが、市の第一印象としては、本当に伝統と歴史のある格調高いまちであるなという感じがいたしました。しかし、残念ながら、今あるものをすべて有効に活かしているわけでもないと感じた次第でございます。

私、自分でできる範囲の中で、少しでもよりよい岡崎のまちづくりのために貢献できることがあればといった考えでやっておるわけですが、残念ながらセーラさんの方から何回も指摘のありました橋の件につきましては、セーラさん、ご存知かどうか。今、矢作橋の架け替えをやっておりまして、これは残念ながら浮世絵にあるような橋には多分ならないと思うのですが、東海道筋における橋としましては、今架け替え中でございますので、それに加えてもう一つ橋を架けるといふのは、非常に困難なことかなというふうにも思っておりますので、ご理解のほどよろしくをお願いをしたいと思います。

いずれにいたしましても、今後、柴田市長のリーダーシップのもとに、美しく風格ある岡崎の創生といったことを目指しまして、景観行政を進めていくつもりでございますので、また市民の皆様方のご理解、ご協力をよろしくをお願いしたいと思います。

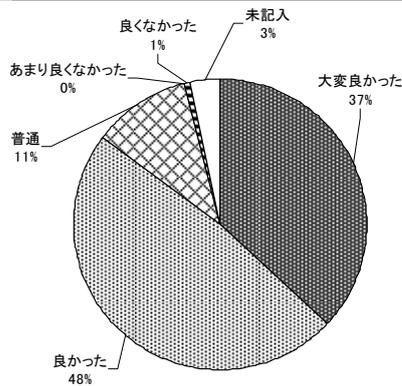
本日は本当にありがとうございました。

岡崎市景観まちづくりシンポジウム アンケート結果

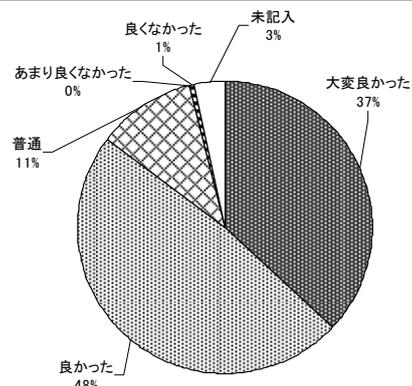
去る平成22年2月14日に行われた、「岡崎市景観まちづくりシンポジウムーみんなで創り出す 自然・歴史・くらしをつなぐ 美しく風格あるまち」では、(株)榊一市村酒造場取締役のセーラ・マリ・カミングスさんをお迎えし、「景観まちづくりのヒントー地域資産(ヒト・モノ・コト)を活かすまちづくり」と題した基調講演を行いました。また「みんなで創り出すー住み良さをつなぐ 美しく風格あるまち 岡崎」をテーマにパネルディスカッションを行ったところ、約300名の方にご参加いただきました。

その際実施されたアンケートには182名の方にご協力をいただき、景観まちづくりの基本理念などにご意見をいただきました。

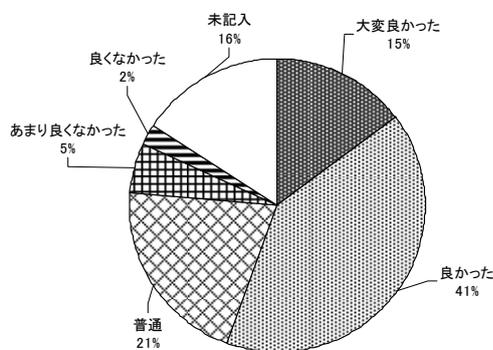
Q1 今回のシンポジウム全体の内容はいかがでしたか?



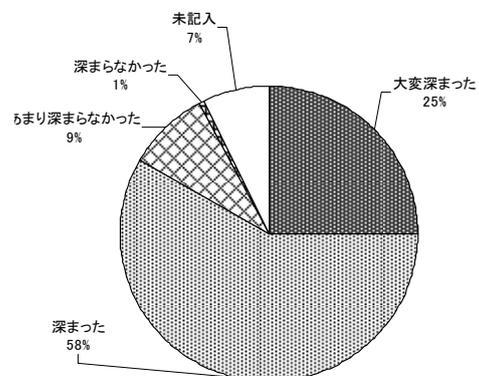
Q2 セーラ・マリ・カミングスさんによる基調講演はいかがでしたか?



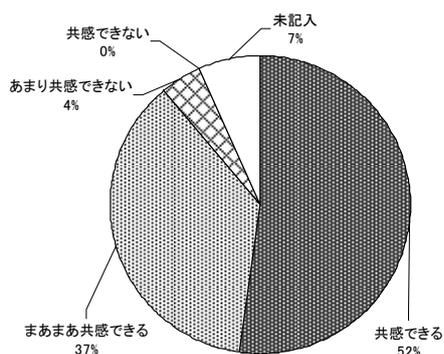
Q3 公開討論会(パネルディスカッション)はいかがでしたか?



Q4 本日のシンポジウムで、景観まちづくりへの関心や理解が深まりましたか?



Q5 景観まちづくりの理念「美しく風格ある岡崎の創生」についてどう思われますか?



今回のシンポジウムの内容、基調講演、公開討論会(パネルディスカッション)については、参加いただいた皆さんの中では概ね高い評価をいただきました。

また、「景観まちづくり」に対する関心や理解が深まった方の割合が高かったようです。

「景観まちづくり」の理念に関しては、約5割の方が「共感できる」と回答しており、「まあまあ共感できる」と合わせて約9割の方が、理念として共感できるとの評価をいただきました。

- 歴史と文化のまち岡崎にふさわしい景観づくりには具体的なルールが必要です。
- 岡崎の景観は崩れつつあると思います。高層ビルが増えるということだけでなく市内の隅々に汚い場所が増えているということ。暮らしに貧富の差があるように、市内に整備され美しい場所と放置された場所（例えば川、野山、道路脇の雑草葎とごみの散らかし放題など）の格差のことです。景観とは指定し整えることでなく、町から汚れた場所を先ずなくしたいものです。
- 景観を良くすることでまちの環境そのものを良くする事が出来ると思う。
- 岡崎は緑や伝統のある建物も多いです。そういったものを活かしたまちづくりを期待しています。
- 岡崎に残されている歴史的な観光資源として活用していくための景観行政が推進されることが望まれます。今後も市民への関心、理解がさらに深まるようご努力をお願いします。
- 街の景観維持と街のにぎわい、楽しい住みたい街づくりをどのようにして調和させていくかに知恵が必要ではないかと感じる。
- 景観法ができて独自のまちづくりをしていこうという動きを岡崎市が主導で市民を巻き込む形ですすめていくことは非常によいことと思っています。観光地を点から線で結ぶ努力を官民あげて行っていくことがすばらしい岡崎の街並み再現につながると信じます。
- 景観行政は地域・協働・共生がキーワードとなると考えますが、一方行政のリーダーシップ機能が重要であります。行政の目的の明確化、事業計画の明確化と具体的な支援等の貢献が必要と考えます。目的達成を継続性のための行政リーダーシップの発揮を！
- 岡崎の固有な景観、岡崎の強味、弱味をしっかりと見つめ直して、強いところは何でどんなあるべき姿かを目指すのかを「絵」にしてからすすめたいですね。
- 良い景観づくりは、ハードのみでなく人の日常生活や様々な活動を伴ったものでなくてはならないと思うし、そうでなければ作れないと思うので、表面上のキャッチフレーズ等や表面上のハード整備でなく、ソフトの整備や支援、PR等をきちんとやって欲しいと思いました。
- 岡崎市には守るべき建物（特に民家）がいっぱいあり、このまま行けばなくなってしまいます（板屋、松本、藤川、本宿、額田など）。木、自然も同様です。守るべきものに対して守れるような活動に力を入れて欲しい。
- 風格あるとは？わかりやすくイメージさせる事が必要ではないでしょうか。
- 僕らが景観まちづくりを大切にすることも大切ですが、それを子供（次世代）に伝えて行くことがもっと大事ではないかと思いました。そのためには僕らが岡崎を好きになる必要があるし、もっと知ることが必要で、それを直接子供に伝えられる場（地域コミュニティ）もたくさんあると良いなと思いました。
- 市内各地域に独自の歴史的資源があり、これらを活かしたまちづくり、風景づくりが必要であり、カミングスさんのような各地域まちづくりの核となる人材の育成が必要ではないか。岡崎独自の歴史、文化、風景、産業を持続的に維持できるよう若者の登用が必要。
- 都市景観部局だけでなく、もっと広いセクションと民間、自治会などとの連携が必要。
- 人は老いて消えていくが景観は無限に続いている。よい景観を幾世代にも引き継いでいきたい。
- 市民の中にもまちづくりへの関心を持つ人がふえているように思われます。NPO等の団体グループの役割も大きいと思います。そういった活動を担う人材を育てることが大切だと思います。行動の中でも、まちづくりの核となるような部署と職種を継続的に設けて欲しいです。寺社、重文、有名な建物、景観だけでなく明治、大正、昭和の身近な生活空間景観も是非大切にしていきたいです。
- 街のそこそこに「アレツ」と目を見張る「良い景観」を見かけることがある。岡崎市が誇る景観は是非共、守って頂きたい。
- 特色ある中核地方都市としての街づくりを進めようという気運を、市民間に醸成していく上での一つの大きなキッカケに、このシンポジウムが位置づけられていることとなりましょう。市民こそって関心を持って参加していけるように。岡崎の景観まちづくりの方向が正しく定まるような確たる思想を明確にして進められるよう期待いたします。
- 私達が見過している景観が市内には多くあり、それを有機的に結びつけて活性化する大切さを学びました。
- 景観まちづくりが具体的に判りにくい。具体例を明示し呼びかけが必要と思う。
- 景観は公共性のあるものであるということに基づいて、文化的で住みやすい街創りを目標としてほしい。